



精神科シリーズ

第10回

こころのホスピタル事業部長精神科医師
認知症疾患医療センター長

むらた
村田 志保

一年にわたり、精神科シリーズをお読みいただき、ありがとうございました。
今回で終了となりますが、最後に「精神科」という部門について、少し雑談をさせていただきます。

東日本大震災から8年が経った日の新聞の見出しに「いまだ癒えぬこころの傷」というのがありました。あの大災害の直後、日本中の精神科の医療者が被災地を訪れ、当院のスタッフもその仲間に加わりました。できるだけ長く支援を引き継いで行くことが目指され、色々な病院がリレーしながら支援が続けられました。

災害時のこころの支援が始まったのは、阪神淡路大震災のころからで、その歴史は残念ながらまだ浅かったのです。あの時、私たちも現地に行ったはいいが、何をしたいのか戸惑い、逆に被災した人たちに慰労されてしまう始末でした。ケアという言葉をお口にするのもおかしい、いたたまれぬ気持ちでした。現地に「こころのケアお断り」という立て札が立ったというのも話題になりました。その後、災害のこころのケアのあり方は随分と進歩しました。しかし、まだ充分に被災者の力にはなっていないのも確かで、難しいものだと思います。

余談ですが、熊本地震の時に現地に赴いた時には、被災した病院の院長先生に「何が一番お役に立てるか」と伺ったところ「壊れた病棟から荷物を運び出して欲しい」と言われ、男性スタッフはひたすら、汗だくでベッドやロッカー

を運び続けました。予想外に感謝をされて嬉しかったのを覚えています。

精神医療は、いつもその時代の社会の動きに敏感であることが要求されます。

薬物依存、いじめ、虐待、自殺など新聞や雑誌を賑わす社会問題は、即、精神医療のなかなだれ込んできます。無論、こういう一筋縄ではない問題は、医療だけで解決するはずはなく、様々な機関や専門家と共同作業をしなければ進みません。ただ、精神医療は、一番理解と優しさに満ちた窓口でありたいと思っています。例えば有名人が違法薬物を乱用する、「意志が弱い」「無責任である」とマスコミは徹底的に叩き、犯罪者としてフラッシュにまみれます。しかし、薬物依存はとも治りにくい病気で、意志の強さとは関係がない、治療が必要なのだということとを伝えなければいけません。さもないければ問題は解決しないのです。

「こころ」というのは何なのだろう、こころは「脳」にある。「脳」は身体の一部であり、それを専門とする脳神経外科や内科とどう違うんだろう。これは、実はいまだに答えの出ない命題です。特に日本人は「身体」と「こころ」が曖昧な国民だという先生もいます。例えば「気疲れ」と

いう概念。身体とこころの両方の疲れを含んでいますね。「脳の疲れ」とは言いません。このニュアンスは外人にはなかなかわからないそうです。「お腹が痛いのに気のせいだから精神科に行くように言われた」と切ながって受診する患者さんがいますが、実はこの「気」という単語こそが「からだ」と「こころ」の接点を象徴していると言えます。とすると精神科の窓口は広いのです。

そして幸いなことに、当科の敷居は一昔前より随分と低くなりました。それでもなお、スティグマ（偏見・差別）や誤解がなくなっているわけではありません。患者さんたちが、それらで辛い思いをすることがなくなるよう、私たちは黒子のように、地域に寄り添う科であり続けたいと思っています。

精神科・心療内科外来・認知症診療

・新患（予約制・午前）

・再診（予約制）

月曜日～金曜日、第1・3土曜日

ご予約先：0261-62-3166
14時～17時の間にお問い合わせください。